書評

フランス五月への執拗な関わり

江口幹『五月革命の考察』

大沢正道

「人の噂さも七十五日」とはよくぞいったものだ。熱し易く、さめ易い、わがお国ぶりは、戦後二十数年の「民主主義」によって拍車をかけられこそすれ、改められる兆しはさらさらない。一九六八年五月のフランスは、もはや「歴史の屑籠」に投げ込まれたかにみえる昨今である。

この強度の健忘症は、あまりにもしばしば耳目を聳動させる事件が踵を接して起こるための症状であろうか。そうではあるまい。つぎつぎとセンセーショナルに報道される幾多の事件も、一皮か二皮むけば同じ根が洗いだされてくるはずだ。この瀕発する事件という状況そのものが、現代社会の、そして現代文明の断末魔を自ら告白しているのである。

フランスの五月も、ベトナム戦争も、文化大革命も、光化学スモッグも、テルアビブ空港のテロルも、日中国交回復も、すべてが連続した根に発している。にもかかわらず、すべてが不連続の現象であるかのように報ぜられ、受けとめられ、一つ、また一つ、浮かんでは消え、消えては浮かぶうたかたの走馬灯と化すのはなぜだろうか。

理由は明らかである。われわれがこれらの事件を知るのは、ごくまれな場合、つまりこの事件の当事者であるか、目撃者であるかの場合をのぞいて、なんらかのメディアでふるいをかけられた情報によってであり、この情報操作の段階で、事件は非連続の断片に仕上げられる。実像らしくみせかけられた虚像の情報が大量生産される。それは〃現代社会の、現代文明の断末魔〃という現実を隠蔽することで、体制の要請に応えている。

虚像の情報は意識の深部に達し、沈澱することがない。表層を刺激するにとどまる。絶えまない刺激は意識の表層を固くするだけであり、それはどのような事件にも反応を示さぬ不感症へとわれわれを導く。強度の健忘症はじつは健忘症ではなくて、不感症なのだ。なにごとも深く感ぜず、したがって意識の深部に蓄えられぬがゆえに、一つ一つの出来事が不連続に受けとめられ、走馬灯のように空しく去っていくのだ。

これは致命的な状態である、といわねばなるまい。なぜなら現実に生起する出来事を媒介とせずに、現実にくいこむなにかを生みだすことはできない相談だからだ。現実にくいこみ、現実を動かし、さらには現実を変革する力を発するには、まず現実に対する不感症の治療から始めなくてはならず、現実に対する不感症の治療は、一つの連続したパースペクティヴのなかで現実の出来事を繰返し反芻することから手をつけられなくてはならない。

いわゆるフランス五月革命のブームが全く去った時点で、麦社が刊行したこの本はその意味で反時代的であるがゆえに、まことにタイムリーであったといいたいとおもう。〃フランス五月革命は乗り越えられた〃とか〃武装闘争の幕は切っておとされた〃とか、いつも時代の最尖端であるかのように、虚像の情報がばらまくモードを追い求め、尻のあたたまることのない手合いが多いなかで、この落着きと執着は貴重である。

とんでもない、乗り越えられたのは手前の方で、フランス五月革命はいまだに未踏の巨峰の一つとして、われわれのまえに聳えている。この本を再読しながら、ふと気づいたのだが、いったい五月革命について日本人が書いた本がどれくらいあったろうか。わずかに思いつくのは海原峻『既成左翼から新左翼へ』ぐらいで、他はことごとく翻訳書にすぎない。海原の本にしても、五月革命に正面から取り組んだというより、その周辺部にライトをあてたものである。

　してみればこの本は、一一八ページほどの小冊子ながら、わが国最初のフランス五月革命に関する主体的な論述の名誉を担っている、といえるかもしれない。

　全体は六章からなる。「第一章初まりとして五月」は五月革命の事実経過とその意義の概観にあてられる。そこでの著者の視点は次の言葉に要約されている。「五月の意義は、それが達成したところにではなく、それが予告したところにある」、それは「現代における革命の主題が、単に貧困であるよりもむしろ、決定権であることを明らかにした」。それは「先進工業国における、初めての、大規模な、公然たる反乱」であり、「根源的な急進性、平等主義、直接民主主義的な志向」に貫かれていた。ここに著者は「現代革命の主題、主体、行動の型態を見る」のである。

　この視点にはおおむね同感できる。ただ欲をいうならば、「第六章来るべき革命の戦略」で触れられている「文明観そのもの」の変革の視点がフランス五月革命の基調にあったところをもう一つ踏み込んでおさえてほしかった、とおもう。そこがいわば現代革命の扇のかなめであり、そこをおさえることで不連続に暴発しているかにみえるもろもろの出来事をつなぐ糸目がくっきりとみえてくるからである。しかもそここそ、著者の本領のはずだ。

　「第二章教育の告発と〃学ぶ〃ことの革命性」では、五月革命前のフランスの学生の現況が、また「第四章管理社会への反乱」では同じ時期のフランスの労働者の現況が述べられ、それに対応して、「第三章大衆としての意識的少数者」では、学生サイドでの運動の目標と方法が、「第五章自治管理への出発」では、労働者サイドでの運動の目標と方法が、それぞれに要領よく、的確に語られている。

　「第六章来るべき革命の戦略」は、学生と労働者の現況、運動の目標と方法をめぐってこれまで述べられたところの上に立って、それを今日ただいまの問題に引き寄せる。いうなれば結章である。著者は現在の体制の強みとして、国家独占資本主義のメカニズムや相対的な繁栄、柔軟性など七項目を、また弱みとして資本の一元的合理主義、底辺層の貧困化、生活様式の激変など五項目をあげ、これらの分析を経て、九項目の行動目標を提示する。さらにまた、それらを整理して、「われわれの目標と、目標達成のための行動と組織」を大胆率直に提起している。

　この最終章は、五月革命の考察からストレートに帰結される以上の内容をもっており、そこにやや異質なものを感じさせるが、この大胆率直な提起はそれ自体、十分な問題性をはらんでいる。それはおそらくフランスなどであれば、激しい論争を巻き起こすたねとなるであろうが、わが国では次元の低い偏見とセクト性のなかに取り込まれているようであり、著者としてまことに心外であろう。

　「五月革命は、単に『初まりにすぎない』弱さとともに、まさしく『初まり』であることの意義と栄光とを備えていた、出発点であった」と著者は書いているが、この本もまた、まさにそのように評されるにふさわしいと、ぼくはおもう。　**（三八〇円麦社）**

書評

三〇年代に自由コンミュンを追求

『資料・農村青年社運動史』

相沢尚夫

一九三〇年代の日本のアナキズム運動、とくに二つのアナキズム革命運動については、未だ解明されない部分が多い。今度農村青年社運動史刊行会から「資料・農村青年社運動史」が出版されて、一九三一年から三二年の間に企図され、実践された革命運働の内容がはじめて明らかになった。

大杉栄が虐殺されたのは一九二三年九月であるが、その後は和田久太郎、中浜哲、古田大次郎、朴烈等の事件が起ったので、支配階級はアナキズム＝テロリズムという宣伝を行うことによって、大衆のアナキズムに対する恐怖を煽り立て、大衆をアナキズムから離間させようとしたが、その間、一九二六年の全国労働組合自由連合会の結成、一九二六年の黒色青年連盟の結成という形でアナキズム運動は、絶えることなく続けられ、人民大衆の間へ地下水のように浸透していった。しかしながらロシヤ革命におけるボルシェヴィキの勝利、普通選挙制の実施に伴う社会民主主義への期待という現実の情勢の変化は、革命的労働者や知識人の目をマルクス・レーニン主義に向わせ、政治的権力獲得のため闘争が労働階級の解放に何の期待も持てないと主張するアナキズムから、改良主義を求める大衆を離反させた。

このような客観状勢の変化に対し、アナキズム戦線は、一方においては広汎な大衆運動を志向するアナルコ・サンヂカリズムと、小数者の創造的暴力が大衆の覚醒と蜂起、革命への道であると主張するいわゆる純正アナキズムとの対立を次第に表面化して行った。石川三四郎、延島英一と岩佐作太郎、八太舟三に代表される理論家による論争をひき起した。

一九三〇年代はこの論争の激化によって、労働組合においても、アナキスト団体においても分裂抗争が、既に定着した時にはじまっている。

八太舟三は、アナルコ・サンジカリズムに対するマルクス主義の影響を重視し、アナルコ・サンヂカリズムを排撃することを主要なテーマとして理論を展開した。そして次第に純正アナキズムの代表的理論家となっていった。八太イズムには価値論などにおいてアナキズム理論を深化させたが、戦術論が欠除していた。そのため口に小数者の創造的暴力を唱えるだけのいわゆる存在的アナキスト（農村青年社の新造話）の存在を許してしまった。

これに対して実践的、戦闘分子は、秘かにグループを組織し、小数者の創造的暴力を民衆の創造的暴力の起爆剤とする戦術を考案し八太が反対した日常闘争の積み重ねによる全村運動（民衆の創造的暴力）を勃発させて自由コンミュンを建設するため、各地に同志を自主分散させ、具体的に地理区画を設定する戦術的方針を展開し、情熱的に各地を宣伝行脚しはじめた。それと共に公然たる文書宣伝たのめ農村青年社を創設し活動したのである。

この運動は、革命の主体を農村に求めたので、都市労働者の自主的な大衆運動がアナルコ・サンヂカリズムであることを認めなかった。しかし純正アナキストの多くが、小数者であることに孤高の誇りを抱いていたのに対

して、大衆と結合しなくて何の革命であるかと主張したことは、高く評価すべきであろう。しかし、自主分散の主張のために結成主義反対を公言するに及んで、他の多くの純正アナキスト、とくに東京における自連と黒連の反撃をひき起した。しかしこの衝撃と反撃とは、純正アナキストのなかの積極分子に、真剣な反省をひき起すという予想外の結果を生んだことを見とおすことはできない。彼等は自連を大衆団体として再び労働運動における位置を自覚させると共に、アナキストの革命団体の必要を検討しはじめた。農村青年社の中心分子、秘密グループの構成員が、資金計画の失敗によって弾圧されたのちの一九三二年五月のメーデーが、自連を中心として在東京アナキストの総動員的参加によって戦われたのは、その表現であった。もちろん、この覚醒と立ち上りとは、ファッショ化の危機の自覚に負う処が多いとしても、農青への反撥という内面的原因があったのである。かくて、このメーデーを契機として自連と自協との共同闘争が組織され、やがて共闘を通じて合同への気運を盛り上げ、大衆運動と結合し、純正アナキズムとアナルコ・サンデカリズムとの抗争を止揚し綜合しようと企図した日本無政府共産党の結成へと進むのである。

それ故、農村青年社の運動は、一般に存在的アナキストと考えられている純正アナキストの革命運動として、日本のアナキズム運動史に独自の位置を占めるものと云わねばならない。

本書は、この運動の殆んど総ての文献を収録している。一九三六年から一九四六年の日本アナキスト連盟の結成に至るまで、十年の運動の中断によって、資料は散逸していたのを、約十年の歳月を費やして、資料の収集に当ったという同運動史刊行会の努力には心から敬意を表したい。同刊行会が云う通り、この運動は、「自由コンミュンを樹立する具体的な革命運動であった。」その意味において、独自性を主張することができる。社会主義国家においても、独占資本主義国家においても、集中的管理社会の重圧から人々は解放されたい意欲に燃えはじめている。集中的管理社会に対置する社会としてコンミュンへの指向は、現代の革命闘争の主題である。クロポトキンが主張した自給自足を基礎とした農工合体の小社会という形態は、クロポトキンの独創的発想ではなかった。パリ・コンミュンをプロレタリア独裁のはじめての試みと認めたマルクスとエンゲルスとは、プロレタリア革命後のプロレタリア独裁の基礎形態をコンミュンあるいはゲマインシャフトとしているが、これに学んだのは中国の人民公社であろう。ただ今日云えることは、コンミュンという社会形態において、それがその名に値するかどうかは、社会の生産、消費等の管理が、労働者農民その他の人民大衆の自治管理のなかにあって、権力的行政支配の排除を如何にして成功させ得るか否かにかかっていることだけである。

一九三〇年代の日本において、自由コンミュンの樹立を直接的な目標として、具体的計画に基づく革命運動が行なわれたということは、広く知られる必要があろう。ただこの運動によって、自由コンミュンの樹立、アナキスト革命の成功がかち取り得るかという問題はまた別であるが、ある地方ではこれがある程度、村民の心を把んだ事実は見逃すことができない。アナキズムの復活が云われているが、復活と呼び得る素地は、自治管理と呼ばれる大衆の革命的な創造力のうちにある。**（一九三〇年代における日本アナキズム革命運動・資料農村青年社運動史・自由コンミュンの樹立とその実践。ウニタ発売。一八〇〇円）**